



様々な通信手段が発達した現代においては、常に無限の情報が世界中を行きかっています。多くの人が、それらの通信網を使って自分の必要とする情報を手にしています。しかし、問題は得た情報を元にどのように判断するかだと思われます。最近の日本の例で一つ挙げるとすれば、「原子力発電所の利用」の問題があります。

現在、日本の原子力発電所は、ごく一部を除いて稼働していません。しかし、首相は海外で巨大な設備を売り込もうとして話を進めてきました。このように積極的に利用しようとする考えと、全てを廃止して使うのをやめようとする考え方と大きく二つに分かれています。この場合、問題なのは、情報の量ではなくて情報を受けた人の価値判断が問われると思います。

ドイツのメルケル首相は、今回の福島事故の情報を受けて、それまで推進派だった態度を変えて全面廃止に動き、ドイツは全面廃止を決定しました。これには、それまでに経験したチェルノブイリの事故によるドイツの放射能汚染の被害のことと、この問題を考える会議に宗教者が委員として参加していて廃止を決める上で影響があったと言われている。

一方で、安倍首相の方はどうでしょう。原子力発電所の再開に向けては、電力会社、財界の意向が大きく働いていること、日本は経済優先の考えが強く、こうしたことの決定に大きく影響していると言われている。

さて、実際に原子力発電所の事故によって

放射能に汚染された地域は、どうなっているのでしょうか？

先日の新聞によれば、除染作業は進んでおらず、一度やっても計画したレベルにまで汚染度が下がらない地域があること、除染は人が住んでいる地域と周辺ということで林や山などは、ごく一部に限定されているということです。つまり除染できない地域があるということです。先日、ある司祭の話聞いたのですが、実際の汚染地域に行くと呼び止めになっていて、そこから先には行けないそうです。しかし、そこには家があり街があり普通の街と全く変わらない景色があるので何とも言えない気持ちにされたということでした。

そして、全く人が入れない地域にも生きている動物や植物がいるということ。かつての家畜も野生化して生きて

いるということです。

旧約聖書の最初「創世記」には、天地と全ての生き物が作られたことが記されています。そして全ての存在が共に生きることを考えています。そのことから考えていくと、このような地域があることは許されることではないと思います。

今、私たちが生きている社会は、このような問題を抱えた社会でもあります。自分とは直接関係がなければ、一部の犠牲には目をつぶっても繁栄を優先させるのか、多くの人が我慢をしなければならないことが出てきたとしても全ての存在と一緒に生きられることを優先させるのか、そうしたことが問われている現代でもあるのです。

## 現代に生きる

チャプレン 田中 誠

## 合同礼拝報告

### 「最後まで残るのは、信仰・希望・愛である」

臼井 嘉男氏（野並キリスト教会協力牧師・元愛耕幼稚園園長）

6月12日（水）に体育館で合同礼拝が行われた。東日本大震災から3年目となった今年は、震災当時、宮城県気仙沼にある愛耕幼稚園で園長をされていた臼井嘉男氏をお招きした。現在は野並キリスト教会の協力牧師をされているが、実は柳城とは非常に縁の深い方で、お二人のお嬢様は柳城出身であり、その間に保護者会会長も務めてくださっていたそうである。震災の起こった年に、柳城がボランティア活動で幼稚園を訪問したことが、今回の機縁ともなっており、昨年の合同礼拝でお呼びしたいという意見も出ていたが、震災後のさまざまな関わりのなかで氏の体調が万全でなかったために、今回実現することとなったものである。そういうこともあり、臼井氏のお話は、「感謝と報告」をさせていただきたいという言葉から始まった。

さて、お話のタイトルは「最後まで残るのは、信仰・希望・愛である」という「コリントの信徒への手紙一」からとられた言葉であり、震災や津波により、瞬く間に人間の命、多くの建造物やさまざまな大切な持ち物が失われた中で、多くの年月を経て本当に残るのは何であろうか、ということに思いを寄せるとき、改めて考えさせられるようなタイトルでもあった。

ただ、臼井氏のお話は、気仙沼における被害状況やそこでの経験やさまざまな取り組みについて語るということにつきるものではなく、その表題からもうかがえるように、「愛することの大切さ、そしてそれを実践するこ

との難しさ」というメッセージが話の全体を包み込んでいた。じっさい、お話の前半部分では、保育者を目指そうとする学生たちに、子どもから大人になることの大切さを熱く伝えてくださり、学生たちの多くは、そこで発せられるさまざまな言葉から多くの恵みを受けていたことがうかがえる。

また、プロジェクターによって映し出された写真を通して、当時の被災地の状況や、震災のときから、気仙沼の幼稚園、教会、そしてその関係者たちと深く密接な関わりをしてこられた様子が伝わってきた。

臼井氏は、一枚一枚に込められた思いを丁寧に語ってくださり、改めて、東日本大震災は過去のものではなく、今も続いている出来事として、さらに未来に向かって歩いていく私たちが共に引き受けていく出来事として、一人ひとりの心の中に刻み込まれたのであった。

以下、学生の感想をいくつか紹介させていただきたい。



心をうたれた言葉があった。それは「私たち一人ひとり、どうしてもいいものなのではない。意味がないものなんてない」ということだ。人は必ず誰かから必要とされている。誰一人として孤独ではないんだと思ひ知らされた。それと「子どもは自分のことだけ考えていけばよいが、大人は自分を客観的にみてそれを批判できるようにならないといけない」という言葉である。すごく胸を打たれた。自分のことで精一杯ならばそれはまだ子どもだということだ。自分を客観的にみて批判するというのは勇氣がいることである。自分はまだまだ大人になりきれていないんだなと痛感させられた。(S.K)

お話は最後まで「愛」のある話だった。ボランティアに来てくださった方に感謝をしたり、礼拝を通して人びとのこととお祈りしたり、また、子どもたちに辛い思いをさせないように配慮したり……先生自身がとても愛のある方だと思った。また、震災の話を書く度に、今のこの「普通」がどれだけ平和で安全で安心でかけがえのないことに気づかされる。震災のあったあの日のことを忘れず、また被害に遭われた方々のことも忘れず、生きていかなければ、と改めて思う。自分も誰かの支えになりたい、とも思った。(A.S)

白井先生が、「オイルが発火して、夜は火事の火だけが見えていたが、子どもたちに見せないように、早く寝ようと声をかけた」とおっしゃっていた言葉に考えさせられました。大人だって地震や津波が恐ろしくて不安になっているのに、子どもが不安

になったり、泣いたりしてしまわないように、配慮しなくてはならないからです。突然の出来事に対応し、子どものことを一番に考えて行動できるのはすばらしいと思いました。このような行動力は、これから保育者になろうとしている私たちにも必要なものだと思います。(S.O)

津波によって流されてしまった家。流れてきた船などによって、潰れてしまった家。流れた油によって火事が起こってその火事で家が燃やされ、何も残っていない場所。津波が来たときに家などと一緒にその場にいた人たちも流された後の写真など、いろいろな写真を見ましたが、その中には、現場に行かなければわからないほどの状況が残っていました。震災から三年経った今も完全に復興という所まで進んでいない東北地方。そういった現状は、今現在ニュースなどでも取り上げなくなってきていて、わたしたちの心の中から風化されようとしていることに気づかされました。でもそれは決してあってはならないことで、未来を生きていく私たちが伝え生きていかなければいけないことだと気づかされました。(A.K)



## 東日本大震災復興支援ボランティア 参加学生報告会

5月15日（水）

名古屋柳城短期大学ボランティアサークルは、昨年の夏休みに学校から被災地ボランティアに行ったことをきっかけに設立されました。初めは3人でメンバー呼び込みを開始し、今では2年生21人1年生11人の総勢32人で活動しています。

主な活動内容は3つあります。1つ目は被災地への支援です。学生生活を送りながら被災地へ足を運ぶのは容易ではありません。まずは学校でも出来る支援をみんなで話し合い活動しています。現在は手作り紙芝居や絵本を届けるために製作を進めています。

2つ目は地域ボランティアです。

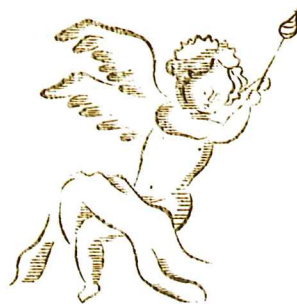
昭和区を中心としたボランティア活動や卒業生の先輩の就職先の施設行事などに参加する予定です。

先日、昭和区の広報紙に載せて頂き、それを見た方からのボランティア依頼もありました。活動の参加者に喜んで頂けるようみんなで話し合い活動内容に向け、より良い準備をしていきます。

3つ目はエコです。月に2度学校の清掃を

行っています。普段掃除をあまり出来ない場所に視点を置き、活動しています。また、校内でエコキャップ運動を行っています。エコキャップとはペットボトルキャップを集めるとワクチンに代えられるという活動です。サークル以外の学生も協力してくれ、多くのエコキャップが集まっています。

私たちボランティアサークルは、まだ出来て日が浅いですが、上で挙げたように、学生生活を送りながら、小さなことからコツコツと活動を送っています。私たちの行っている活動が少しでも多くの人の笑顔に繋がっていけばと考えています。そして活動1つ1つで感じることを考えることを大切に、学び豊かに今後活かしながら活動を行っていきたいと思います。



## 前期の礼拝から 6月19日（水）野崎 真琴 先生

6月19日の礼拝では、昨年12月に出産された本学の野崎先生が、妊娠・出産・子育てを通して教えられたさまざまなことや保育者という仕事のもつ大切さについて、とても興味深く語ってくださった。

\* \* \*



私は昨年3月に結婚、12月に出産し、その約3か月半後の今年4月には職場復帰し、現在子どもは保育園に通っています。結婚から今に至る1年数か月の間は、目の前ことに必死で、ひたすら走り続けてきた感じがします。

産休に入るまでは仕事もあり忙しく、なかなか出産に向けての身の回りのまた心の準備が進まず、自分の置かれている状況や体の変化に、気持ちや行動が追いつかず、焦りや不安を感じることもありました。しかし、妊娠中は、自分の体内に生き物がいるという、不思議な感覚、自分の力や努力を超えたところで日に日に育っていく小さなお腹の赤ちゃんに、生命の神秘、偉大さを感じました。

産むまでは、出産後はどれほどの感動があるかと思っていましたが、実際、私の場合は、長丁場だったこともあり、とにかく子どもも自分も無事でよかったという安堵感の方が先でした。もちろん元気な産声と小さな赤ちゃんの姿には、涙がこぼれるほどの感動がありましたが、それに浸る間もなく、慌ただしい育児生活はすぐさまスタート。昼夜関係なく数時間おきの授乳とおむつ替え。最初の数か月は慣れない育児に毎日必死で、体力的にも精神的にもかなり辛かったです。赤ちゃんは、最初は本能だけで行動するので、眠い、お腹が空いた、暑い等々、とにかく不快だと泣く。うちの子はあまり寝ない子で、また抱っこしていないと泣くので、寝不足に加え腰痛等も思い大変でした。産後2か月位は実家に里帰りしていたので、母や姉に助けられました。一人だったらまともに育児が

できなくなっていたかと思うと、身近で支えてくれる人のありがたさを身に染みて感じました。

悪戦苦闘しながらも、少しずつ子どもの気持ちも自分なりに読めるようになり、意思疎通が図れてくると、最初の頃感じたような辛さは減ってきました。その代りに今は、仕事と子育ての両立での苦勞を感じています。しかし、毎日子どもの顔を見、子どもと触れ合うことで、元気づけられています。次第に子どもの表情や動作も豊かになり、こちらがしたことに対して体中で喜びを表してくれると、とても嬉しくなります。生後しばらくは泣き叫んで嫌がっていたおむつ替えも、その繰り返しの中で気持ちよさを学習していき、今では嬉しそうにしています。また、話しかけたりあやしたりすると、「えへへ」「きゃっきゃ」と楽しげに笑うようになり、その笑顔や声にこちらも楽しく幸せな気分になります。

時に忙しさや疲れで余裕がなくなり、一番身近な夫と意見が食い違う等でぶつかることもあります。後で冷静になると、相手も忙しくて大変な中、家族の為に一生懸命頑張っているのに…と、自分の心の狭さを反省し、改めて居てくれていること、してくれていることのがたさに気付きます。時にぶつかりながらも、話し合う中でお互いの気持ちをより理解し、また自分自身を省みる、そんなことを積み重ねながら、より気遣いあっている関係が築かれていることを感じます。

今、一番強く感じることは、多くの人に支えられて、子どもも今の自分もあるということです。夫や母など身近にいる家族や友人はもちろん、子どもが通う保育園の先生の存在も大きいです。子どもも安心して過ごせるし、私自身毎日の送迎時に“笑顔”で声を掛けてもらうだけで元気になれます。我が子の成長を共に見守り支え、喜んでくれ、親の苦勞や喜びにも共感してくれる。保育者は、人の一生の思い出に残るかもしれない素敵な仕事だと、自分が保護者の立場になって実感しました。柳城で学ぶ皆さんも、今様々な悩みや苦勞はあると思いますが、人の人生を支える素晴らしい仕事に就くために頑張ってください。



## 花の写生の授業で

松下 明生

こんにちは。今年度より名古屋柳城短期大学でお世話になっております。長い歴史と伝統のある柳城に奉職することができることに感謝し、改めてその有難さを感じております。

早いもので季節が巡り、私の中ではまだ4月のような気分ですが、体力もついていかず環境に慣れることにも時間を費やしています。それから最近になって大切なことを忘れて過ごしていましたので、紹介することにします。

今日、保育専攻科の絵手紙を書く授業で花の写生をしました。今朝、スーパーで花を購入し、2限目授業の時に、写生をする意味などを偉そうに語りながらハッとしました。何かと言うと、スーパーで見たときには何も感じなかったのに、写生をする授業になって初めて「花が美しく咲いていること」に気が付いたのです。なんとということか授業が始まるまでは、近くに咲いている花の魅力を受け止めることができませんでした。スーパーでは、花は単なるモチーフでしたが、授業が始まって、学生たちの「かわいい!」とか「きれい」とか言う声を聞いて、花が美しいことに初めて気が付いたのでした。

大切なことは必ずしも教員が学生に教えるのではないことを改めて知りましたし、技術や技法を教えることよりも、美しいと思うところを忘れてはならないと思いました。

この柳城に赴任して数か月、自分のこころの未熟さに反省しながら、皆様に感謝し、毎日の生活を有難く享受しております。どうぞ今後とも宜しくお願い申し上げます。



## 私が教会に行くようになったきっかけ

柴田 智世

私は20歳の時に、クリスチャンである友達から聖書を頂いて、初めて手に取りました。そして、彼女から日曜日には教会に行くといいと勧められ、あまり疑うこともなく礼拝に出るようになりました。しかし、当時学生だった私は、日曜日は遊びに行ったり、寝坊をしてゆっくり過ごしたりし、また、電車で40分かけて教会に行くことに億劫さを感じ、礼拝を休むことが多かったのです。むしろ、「日曜日は遊ぶ日なのに、どうして教会なんかに行くのだろう」と疑問に思っていました。

そのような日々が約1年間続きました。ある日曜日の朝、目が覚めたとき、いつもなら「礼拝は面倒くさいな」と思うところですが、その日はなぜか違い、不思議なことに教会に行かなければいけない気持ちになりました。そして、支度をして出かけて行ったところ、礼拝の司会者が、「皆さん、教会は神様の声を聴くところなのですよ」と言うのを聞いて、私は強い衝撃を受けました。それから私は毎週、礼拝に出るようになり、半年後に洗礼を受ける決心をしました。

クリスチャンになってからは、これまで当たり前と思っていたことが、神様の恵みであると感謝できるように、考え方が変わりました。聖書の神様は、私たちに実にたくさんの祝福を与えられます。そして、神様がこれまで私にしてくださった恵みの中で、今年一番のビッグなことは、何といても名古屋柳城短期大学での職を与えられ、今こうして皆さんと一緒に学びの時が与えられていることです。どうぞよろしくお願ひいたします。



2013年7月26日発行 第24号

発行所 名古屋柳城短期大学  
名古屋市昭和区明月町2-54

編集兼  
発行者 名古屋柳城短期大学 宗教委員会

印刷所 株式会社 マルワ